

新トロイア物語

阿刀田高



新トロイア物語



講談社

新トロイア物語 しん ものがたり

著者 あとうだ たかし 阿刀田高

一九九四年一月三〇日 第一刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一十二一 郵便番号 一一二〇一

電話 編集部 (〇三)五三九五―三五〇五

販売部 (〇三)五三九五―三六二二

製作部 (〇三)五三九五―三六一五



印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります

©Takashi Atoda 1994, Printed in Japan

落し本・乱し本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてに願います。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

新トロイア物語 目次

茜色の海	5
笑う前夜	68
軍船襲来	142
葬送の歌	209
城塞燃ゆ	283
西方伝説	350
カルタゴ	414
二つの愛	474
遠い残照	540
あとがき	555
主な登場人物一覧	563

装丁・地図
和田 誠

新トロイア物語

茜色の海

時間は滅みなく、だが悠揚と流れていた。

西暦前十三世紀。文字を知った人間たちの営みがようやく始まっていた。それは記述された歴史の誕生であり、真の意味でのホモサピエンス（知を持つ人）の擡頭であつた。

ティグリス、ユーフラテス川の流域に発祥した文明は、長い時間をかけて西漸する。パレスチナを経てアナトリア半島へ、エーゲ海へ、そして更にバルカン半島からイタリア半島へと広がった。その道すがら豊饒な古代エジプトの文明からも多大な叡智を集め取った。独自に発達した文明もあつただろう。今日に栄える西ヨーロッパの諸地域は、おおむねまだ未開の薄闇の中に眠っていた。

——夕日が美しい——

と、これが幼いアイネイアスの心に刻まれた、もっとも古い故郷の記憶である。エーゲ海の黄昏は本当に美しい。それは、赤銅に燃えた太陽が西の海を茜色に染めてとろとろと滴り落ちて行く夢幻の

風景であつた。

アイネイアスは、アナトリア半島の北西部に位置するトロイアの地で生まれ育つた。現在のトルコ領。マルマラ海がダーダネルスの細い海峡を抜けてエーゲ海に開く、そのとば口のあたりに盛衰した小王国である。図らずも伝説に英名を残すこととなった王は、プリアモスと言つた。

鬱蒼たるイディ山麓の原林を潜り抜け、スカマンドロス川の小高い川岸に立つと、王国の風色が一望のうちに収まる。岩繁みに這う葡萄の蔓、褐色の粗肌を晒す段丘、灰緑色に繁るオリブの森、疎らに集う羊たちの群、遠く高く連なる城壁、そのむこうに青々と光る海原、少年は幾度この風景を眺め見たことだろうか。

牧歌的な風景の中に浮かび建つトロイア城の雄姿は、何にも増して頼もしい。

——真逆の時は、あの城が守ってくれる——

剛々たる塁壁は幼い心にも確かな安らぎを与えてくれた。

すでにしてトロイア人たちの間で「プリアモスの平和」という言葉が囁かれていた。

アイネイアスの幼い頃と言へば、プリアモスがこの地を治めるようになってから十有余年の歳月しか経ていなかったが、プリアモスは歴代の王たちが培つた治世を継承し、発展させ、一気に国力を増大させた。なによりも平和が長く続いていた。国外での戦乱は幾度か数えたが、トロイアの領土そのものが戦火に侵されることはなかった。周辺に跳梁する蛮族たちを葬り、近隣の諸国とは友好関係を保ち、産業をおおいに育成した。堅牢無比の城塞を築いて外敵の脅威にも備えた。

トロイアの地は、こうした目的によく適っていた。東地中海の一隅を占めるエーゲ海は、交易の要路として栄えていた。古代人は想像以上に活発に、勇敢に、この海を往来していたのである。黒海のかなたから運ばれて来る物資は、トロイア人たちが看視する海峡を経なければ広く地中海の市場へは供せられない。地中海の物産もまた同じ航路を通じて広大な内陸部へと運ばれていた。少し後代の記

録になるが、繁栄するギリシア都市国家の穀倉を満たしたのは、少なからず黒海沿岸地方の農産物であつた。

大麦、小麦、金、銀、銅、宝玉、木材、工芸品、香料、武器、おそらく奴隷なども取引きの品目に加えられていただろう。つまり、広大な後背地と通商の海とを結ぶ要点、それがトロイアの支配する領域であつた。船と航路の安全を保障する代りにトロイア人は通行税のようなものを徴収していたらしい。

領土は山がちであつたが、家畜を養う犁耕農業が定着し、食糧の自給と人口の増加を支えてくれた。山の幸、海の幸にも恵まれていた。かくてトロイアの国民は「ブリアモスの平和」が続く温もりの中で古代人にしては珍しい豊かさを享受していたのである。

幼いアイネイアスがこうした細かい事情まで知るはずもなかつたが、彼の脳裡に刻み込まれたものは、この豊かさを象徴する長閑な風景であつた。心地よい安寧であつた。

黒海はその名の通り黒い色調を帯びた海である。その延長であるマルマラ海もダーダネルス海峡も同様に黒ずんでいる。それがエーゲ海へ入り込むと、一転して明るく、青い海へと変る。アイネイアスが望み見た海も群青に輝く海原であつた。朝な夕なに斜光を浴びて葡萄酒色に染まる広大な渡津海であつた。西へ広がる海への憧憬も、幼い魂に刷り込まれた原体験の一つであつたろう。後年に勃発するトロイア戦争も、それに続く彼自身の数奇な運命も、幼いアイネイアスが到底予測できるものではなかつた。

「さあ、お起きなさい」

アイネイアスが六歳を迎える朝である。乳母のカイエタに声を掛けられ、アイネイアスは円な眼を開いた。

外はまだ薄暗い。

羊の毛皮を蹴^とつて跳^とび起き、枕元の粗衣を掴^{つか}んだ。

「銀。先に体を浄^{きよ}めろ」

と、父の声が響く。

幼い頃のアイネイアスは銀と呼ばれていた。古代ギリシア語で言えばアルギュロスである。

鉱産物としての銀はすでに発見され、広く実用に供せられていた。もちろん貴重な資源である。

だが、アイネイアスが銀と呼ばれた直接の理由は金属の銀とは関わりが薄かったらう。彼の頭髮が生れながらに銀色だったから。褪^{たい}色のせいではなく、白銀^{しろぎん}に輝くプラチナ・プロンドであった。

当時のアナトリア半島にはさまざまな民族が住みついていていたが、その中にあってもプラチナ・プロンドは珍しい。アイネイアス自身を除けば、乳母のカイエタの髪がこの色を帯びているくらいのものである。身体の特徴で人を呼ぶのは、古代社会のならわしである。銀色の髪と端整な面差^{おもてあは}がアイネイアスの特徴であった。銀の名はつきづきしい。

「ここへおいでなさい」

カイエタが濡^ぬれた白布でアイネイアスの体を拭^{ぬぐ}い、オリーブの油を塗る。新しい衣裳を纏^{まと}い、革^{かわ}製の浅靴^{はく}を履^はいた。

「早くしろ」

父のアンキセスはすでに身仕度^{みじた}を終えて待つていた。父の顔は大きく厳しい。周到な目配りで息子の動作を見守っている。

家の奥まった一郭^{いっかく}に、イディ山の大神を祀^{まつ}る祭壇がある。陶製の高坏^{たかつき}に葡萄の酒を満たして捧げ、神前の炉^ほで屠^ほつたばかりの小羊を炙^{あぶ}った。

父が左の拳^{こぶし}を額^{ぬか}に当て、眼を閉じて神に祈る。アイネイアスも脇に並んで父の仕草^{せそう}に倣^{なま}った。

祈りはいつもにも増して入念である。気がつくとき、カイエタも部屋の隅で祈っている。三人だけで憤しく暮らす小さな石積み住居であつた。

祈り終えると、祭壇の酒を降ろしてカイエタが父の盃に注ぐ。アイネイアスも少し飲んだ。苦い。

胃の腑が焼け、全身が熱くなる。

小羊の肉を切つて父と子で頬張つた。

父が青銅の剣を腰に吊す。アイネイアスにも短い剣が渡された。

「よいな」

「拔かりありません」

腰を低くし、恭しく頭を垂れて答える。それが出陣を前にした武士たちの作法であつた。父は我が子の健気な様子を見て笑いかけたが、すぐに厳しさを取り戻し「よし」とばかりに頷いてから、

「行くぞ」

「はい」

「御無事のお帰りをお待ちしております」

カイエタの言葉も、こうした時の決まり文句である。

父と子は勇んで家を後にした。

東の空が明るく映えている。路地を抜け、表通りに出ると、羊飼いが羊の群を追いついて立っている。黒い犬が後を追う。麦を挽く女たちが作業場へ急ぐ。いくつかの屋根から煙が立ち上る。夜明けを告げる鐘が鳴った。南の城門はすでに開け放たれていたが、どこへ行ったのか門衛の姿は見えない。

鉤型の通路を抜けて城外へ出た。

坂を下り、しばらくは岩繁みの道を進んだ。城の周辺では麦を作る畑地は限られている。多くは石

灰質を含んだ岩がちの荒野で、斜面にはオリブの樹が、平地には葡萄が、斑点のように疎らに植えられていた。

太陽が山の端に輝き、灰色の道に二人の影が長く映った。季節は春の終り。温気が少しずつ募つて来る。

父は片足を引きずりながら歩く。

アイネイアスが生まれる少し前、アンキセスはトロイアの軍勢二百余人を率いてイオニアの山地に出陣した。現在のイズミール市の郊外であろうか。その地に跋扈する悍猛な蛮族を鎮圧するのが遠征の目的であった。近くの山中に錫の産地があつて、この地の権益を譲るわけにはいかない。青銅器の製造に錫は欠かせない。一年を越える攻防のすえトロイア軍は勝利を収めたものの軍勢の大半を失うほどの苦しい戦いであつた。最後の戦鬪で敵の投じた長槍がアンキセスの下腹を貫き、指揮官にとつては半死半生の凱旋となつた。アイネイアスは、この戦場で生まれた。

トロイア城に担ぎ込まれたアンキセスは、手厚い看護の甲斐があつて、かろうじて一命を取り留めたが、深い疵跡が下腹部に残り、歩行もままならない体軀となつた。

それから六年あまり。今でも無様に足を引きずらなければ歩くことができない。

——差し障りはないのだろうか——

アイネイアスは父の足取りを案じたが、父は思ひのほか速足で進む。アイネイアスはなかば駆け足で追わなければならなかつた。

父は終始無言で行く。けつして無駄口をきかない。それが勇者のたしなみらしい。

スカマンドロス川を遡り、褐色の水に別れて細い山道へ入つた。ところどころに急な登り坂がある。だが父の足並みは乱れない。肩を揺らし、腰を振りながらどんとどんと進む。猿のように素早い。父の噂は幼いアイネイアスの耳にも届いていた。勇猛果敢な軍師と聞かされていた。知識も広い。

とりわけアンキセスは国外の事情に通じていた。

——俺だつて負けないぞ——

父を思うときはいつも固いものが少年の下腹を貫く。父のような優れた勇者になることが少年の夢であつた。

もっと幼い頃のアイネイアスは、血を見るのが怖かつた。そんな弱氣を父は乳母のカイエタから聞いたのだらう。ある日、アイネイアスを野に連れ出し、眼の前で羊の腿を切り裂いた。鮮血が泡を混えて吹き出す。草の葉をねつとりと濡らし、土の凹みに落ちて赤い水溜りを作つた。父は、苦痛に戦く羊の首を押さえて、そのさまをアイネイアスに凝視させた。羊は脚の毛をまっ赤に染め、力なく倒れる。父は疵口を縫い合わせ、羊を担いで家に戻つた。十日もすると、羊は元氣を取り戻し、片足を引きずりながらも他の羊たちと一緒に餌を食らうようになった。

「銀。よく見ておけ」

「はい？」

「あれほど血を流しても羊は死にやしない」

「はい」

「人間とて同じことだ。血を恐れるな。簡単には死なない。刺さつた刃物は抜くな。まず疵口の上を固く縛れ」

「はい」

たしかにあれだけの血を流した羊が死なないものならば、流血を恐れることはない、とアイネイアスは納得した。父も大槍で刺された時には、さぞかし沢山の血を流したにちがいない。

——それでもこんなに速く歩く——

不恰好だが、頼もしい。

アイネイアスのほうは、つね日頃から山野を駆け廻っている。このくらいの速度なら馴れている。どんなに長い距離でも……父の前でへこたれるわけにはいかない。事実、心が昂ぶって、疲労を感じない。

三叉路を左へ曲がった。

そこから先はアイネイアスも行つたことのない山中である。羊腸たる小径が続く。笹が繁り蔭が這い、獣道に近い。薄暗い森を抜け、崖を這い、再び道のない繁みに入った。知らない鳥が異様な声をあげて飛び立つ。一際高い山の頂きが頭上に高く伸び掛かる。太陽がその上に昇って、眩い光が二人の顔を刺す。手の甲で汗を拭いた。

せせらぎが聞こえる。

蔓を掴んで崖を下り、溪流で喉を潤し顔を洗った。

そのまま溪流を昇り、瀬を見て緩やかな川岸へ上がると、窪地に二つ、三つ、日干し煉瓦を積んだ粗末な家が見える。山間の盆地に集落があるらしい。

「着いたぞ」

父が初めて大きな声を漏らした。

高いテレビンの木が一本、目印のように立っている。檜の木によく似ている。そこが真言部と呼ばれる神官の家であった。

「ごめん」

父の呼び声に応えて女が現われた。

来意はすでに伝えてあったのだろう。女は父の顔を見て、すぐに家の中へ消えた。

小さな集落は周辺を山に囲まれている。川も近い。狭いながらも耕作地がある。家畜の匂いも漂ってくる。だが侵奪者がこの村を襲うのはむづかしい。

トロイアの山中にはこうした集落が随所に点在し、王の代人が（多くは集落の長であつたが）治めていた。王は代人を仲介にして賦庸を課し、外敵から守り、取引きを助け、生活に必要な品々を配っていたのである。

「よくいらした」

声に続いて白髪白髯の老人が姿を現わした。

「お久しぶりです」

二人は両腕を水平に交えて頭を垂れる。父と老人とは顔見知りらしい。

老人は、王家に認められた真言部であると同時に村長の立場を兼ねる人であつた。挨拶のあとで老人はアイネイアスに視線を移し、

「この子かね」

と尋ねる。

「アイネイアスと申します。今日、日の出とともに六歳になりました」

父もアイネイアスを見つめながら丁寧な言葉で言う。父がこんな言葉遣いで話すのは珍しい。

——偉い人なんだ——

真言部は神の使いであり、だれにでも尊敬される身分である。アイネイアスは身を堅くしたが、それでも、

——負けるものか——

両足を広げ、力強く構えて老人の顔を見返した。

「うむ。なかなかの美形じゃな」

「賢い子です。ギリシア人の言葉がわかります。戦わせても同年の子等には負けませぬ。弓も引きま

す。野鹿のようによく走ります」

我が子といえども、こうした時にはありのままに告げるのが習慣であった。

老人はアイネイアスの肩を両手で掴み、筋と骨との発達を確かめるように強く揺すってから、
「アイネイアス」

と、くぐもった声で呼び掛ける。

「はい」

「上ってみろ」

と、高いテレビンの木を指差した。

「はいっ」

木上りなら得意である。

低い枝に跳びつき、するすると攀じ上った。鋭い棘が掌に刺さったが、弱味は見せられまい。

父と老人はアイネイアスの動作を見送りながら話し合っている。

「イオニアの戦場で生まれました」

「そのことは聞いておる」

「身分の低い……」

と、父は呟いたが、それから先の言葉はアイネイアスの耳には届かない。それよりも木のでっぺんを極めることに夢中だった。

「よし、降りて来い」

途中まで戻ると、今度は、

「そこから跳び降りろ」

躊躇うこともなく、三、四メートルの高さからぽんと跳び降りた。

「あなたもひどいめに遭われた」